

重複來文(原始收文序號:1012008466,日期:101-10-04 12:13:17)

檔 號: R200206  
保存年限: 5

# 南臺科技大學 函

地址：台南市永康區南臺街一號  
承辦人：黃心瑜  
電話：06-2533131#6301  
傳真：06-3010007  
電子信箱：jap@mail.stust.edu.tw

秘書侯青威

受文者：國立暨南國際大學

擬辦：

發文日期：中華民國101年10月4日

發文字號：南科大日字第1010010356號

速別：普通件 專員王淑娟

密等及解密條件或保密期限：101.10.06

附件：如文 (101103561\_0010356A00\_ATTCH5.TIF、

101103561\_0010356A00\_ATTCH6.TIF、101103561\_0010356A00\_ATTCH7.TIF

101103561\_0010356A00\_ATTCH9.JPG，共4個電子檔案)

主旨：本校訂於2012年10月20日(星期六)辦理「大學普及化之日語教育的可能性—動機管理、大班級授課、學生品保—」國際學術研討會，敬請轉知並鼓勵貴屬成員參與，餘詳如說明，請查照。

說明：

- 一、本研討會旨在大學普及化，幾乎人人都可以進入大學的今天，日語教育也面臨了許多問題。藉由邀請來自日本、韓國等專家學者從國際觀點，來探討台灣國內目前日語教育面臨的問題，並進而提供有效之意見。
- 二、辦理時間：2012年10月20日(六)，上午9時至下午17時45分。
- 三、辦理地點：本校圖書館十三樓國際會議廳。
- 四、檢附本次研討會議程表、邀請函及報名表，敬請卓參。
- 五、相關資訊請上網至應用日語系查詢<http://japan.stust.edu.tw/>
- 六、相關問題，請洽業務承辦人：黃心瑜 聯絡電話：06-2533131 分機：6301 電子郵件：jap@mail.stust.edu.tw
- 七、請惠予參加人員公差假。

正本：公私立大專校院

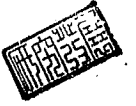
101年10月4日暨收文總字第(010012292號



研究發展處

裝訂線

重複來文(原始收文序號:1012008466,日期:101-10-04 12:13:17)



副本：本校應用日語系

10/10/04  
15:08:49

裝



線

# 南台科技大學應用日語系 2012 年國際學術研討會

大学大衆化状況における日本語教育の可能性  
 ——モチベーション管理・多人数クラス・学習効果測定——

日期: 2012 年 10 月 20 日 (星期六) / 地點: 南台科技大學 國際會議廳 ※圖書館 13F



時間	議題	
8:30~9:00	報到	
9:00~9:30	開幕式: 戴謙(南台科技大學校長) 致詞	
9:30~10:30 介紹/演講50分/提問	專題演講(1) 主講人: 楠藤紳一郎(日本佐賀大学全学教育機構教授) 題目: 学習意欲を引き出すために、教師が「できること、すべきこと」によってはいけないこと 主持人: 吳玟定(〔韓国〕建國大学校前庭大学日語教育科教授)	
10:30~10:45	茶敘	
10:45~11:45 介紹/演講50分/提問	專題演講(2) 主講人: 陳淑娟(東吳大學日本語文學系教授) 題目: 台湾の日本語教育における「アニメ」の活用—J-GAP(TAIWAN)の活動を中心に— 主持人: 楠藤紳一郎(日本佐賀大学全学教育機構教授)	
11:45~12:15 發表20分/提問10分	發言人: 山本洋(〔日本〕金沢大学国際機構留学生センター兼人間社会環境研究科准教授) 題目: 台湾の大学における海外インターンシップと学生の意識 主持人: 蕭玉燕(南榮技術學院應用日語系副教授兼系主任)	
12:15~13:15	午餐	
13:15~13:45 發表20分/提問10分	論文發表A會場 發言人: 蕭玉燕(南榮技術學院應用日語系副教授兼系主任) 題目: 新入生の日本語能力レベル差の解決策について—南榮技術學院応用日本語学科を事例として— 主持人: 陳淑娟(東吳大學日本語文學系教授)	論文發表B會場 發言人: 山藤夏郎・陳幸希(南台科技大學應用日語系助理教授) 題目: 日本語学習過程におけるモチベーション変動要因の分析 主持人: 山本洋(〔日本〕金沢大学留学生センター准教授)
	13:45~14:15 發表20分/提問10分	發言人: 蔡錦雀(吳鳳科技大學應用日語系助理教授兼系主任) 題目: 四技應日系學生的學習特性及提升課堂學習動機和成效之探討 主持人: 蘇文郎(政治大學日本語文學系教授)
14:15~14:25	茶敘	
14:25~14:55 發表20分/提問10分	發言人: 吳承和(台灣師範大學課程與教學研究所博士班) 題目: 第二外國語としての日本語授業への試み—アニメを教材にする可能性及び映像教材の使用について— 主持人: 蘇文郎(政治大學日本語文學系教授)	發言人: 久保田佐和子(文藻外語學院日本語系講師) 題目: 台湾日本語学習者が抱える第二言語不安の実態について—文藻外語學院の場合— 主持人: 楠藤紳一郎(日本佐賀大学全学教育機構教授)
	14:55~15:25 發表20分/提問10分	發言人: 池田裕介(文化大學教育推進部講師) 題目: 動機ストーリーから見る学習者のモチベーションの維持—あるオタクのライフストーリーインタビューをもとに— 主持人: 蔡錦雀(吳鳳科技大學應用日語系助理教授兼系主任)
15:25~15:40	茶敘/會場更換	
15:40~16:40 介紹/演講50分/提問	專題演講(3) 主講人: 蘇文郎(政治大學日本語文學系教授) 題目: 台湾における日本語教育の歴史と今後の方向性 主持人: 蕭玉燕(南榮技術學院應用日語系教授)	
16:40~17:40 介紹/演講50分/提問	專題演講(4) 主講人: 吳玟定(〔韓国〕建國大学校前庭大学日語教育科教授) 題目: 韓国における日本語教育の可能性—日本語を母語とする日本人・日本人に対する日本語教育を中心に— 主持人: 陳淑娟(東吳大學日本語文學系教授)	
17:40~17:45	閉幕式(鄭美華 南台科技大學應用日語系副教授兼系主任 致詞)	

合辦單位:〔日本〕金沢大学国際機構留学生センター 協辦單位: 公益財団法人交流協會



# 大学大衆化状況における日本語教育の可能性

——モチベーション管理・多人数クラス・学習効果測定——

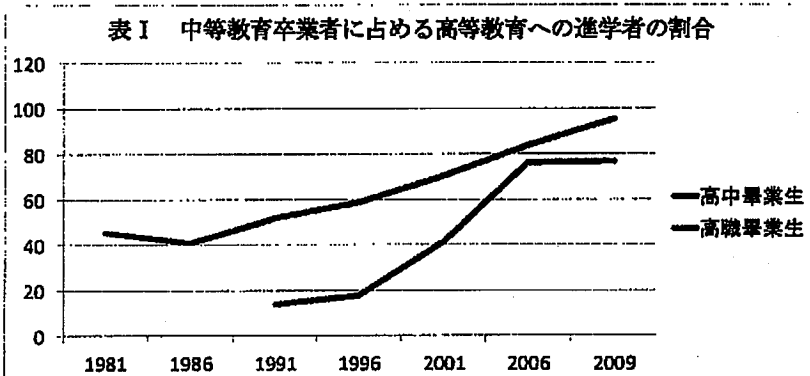
2012年南台科技大学応用日語系国際シンポジウム運営委員会

## 1. 問題の所在

### 1-1. 大学の「大衆化」

現在、大学の置かれている状況は、大きな変化の波に呑まれている。台湾に限らずグローバルな水準で進行している、大学の量的拡大、すなわち「大衆化」という変化である。かつて、マーチン・トロウ(1976)は、現代産業社会に置かれた高等教育のあり方が、エリート型→マス型→ユニバーサル型という、基本的性格を異にする三つの段階を通じて不可避免的に変化・拡大し、それにもなつて高等教育制度の目的・機能・構造もまた質的に変化せざるをえないということを指摘した。ここでいう、「ユニバーサル型の教育」というのは、「従来よりはるかに広範な“学生層”にも接近可能な新しい教育形態と、きわめて多彩な“学力基準”によって特徴づけられるもの」であるとされ、「その学生層はたんに青年人口層にとどまらず全成人人口に近い構成をもつものとして特徴付けられるという〔トロウ(1976: 15)〕。そして、同年齢人口比でみた在学率が50%を超過する時期を指標としてマスの段階からユニバーサルの段階へと移行するのだとされている。

このようなトロウ・モデルに従えば、台湾の高等教育(大学)は、すでにユニバーサル段階に入っていることになる。台湾では、政治体制の民主化による教育政策の見直しを背景として、1990年代頃から大学の「大衆化」が著しい勢いで進んできたのだが、表Iに窺われるように、一般高校の卒業生における高等教育機関への進学者の割合は、1981年の約45%から2009年



教育部統計處「中華民國教育統計-民國96年版」【(一)各級教育簡況、10. 各級畢業生升學率】、「中華民國教育統計-民國98年版」【98學年度各級概況】をもとに作成。

の約96%とほぼ倍増しており、職業高校の場合になると、データのある1991年のおよそ約14%から、2009年の約77%と、この20年近くの間にも劇的ともいえる変化を示していることがわかる。

このときに注意されるのは、大学就学者人口の増加という現象が、同時に、大学という空間の人口構成を変化させるということである。つまり、これまで、人口全体の一部から構成されているエリートを育成する機関という役割を担い、かつまた、その様な役割を期待する人々によって構成される機関であった大学は、現在では、もはやどのような役に立つのかははっきりしない、アカデミックな学問には全く期待を寄せないような階層の人々、言い換えれば、自分の将来に直接的に役に立つような実用的な技術を身に付けさせてくれることのみを期待するような階層の人々から構成される機関へと変貌しつつあると言えるのである。

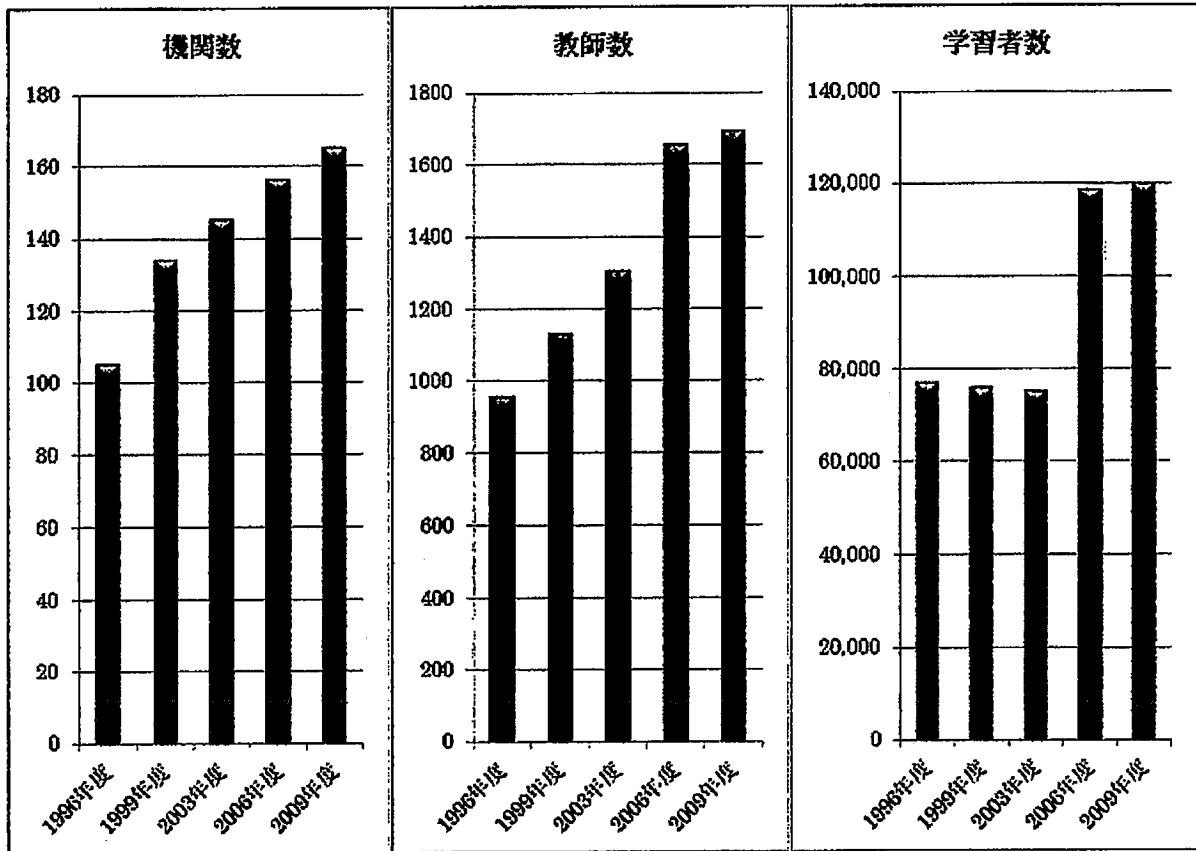
このような事実をふまえて、台湾の日本語学科の歴史をたどっていくならば、1990年代からの「応用日本語学科」の増加という現象が、今まで述べてきたような「大学の「大衆化」」という現象と比例する

4/19

ようなかたちで起こっていることが見えてくる。1990年代に入った頃から、より実用性を重視した、「応用日本語学科」という組織が次々と新設されてきたのにはこのような背景があるのだ。



表Ⅱ 高等教育機関における日本語教育環境



(財団法人交流協会 (2009) 「2009年度 台湾における日本語教育事情調査 報告書」をもとに作成)

### 1-2. 不本意就学 (involuntary attendance)

台湾の高等教育機関における日本語学習者は、(財) 交流協会 (2009) によると、119,898人と集計されている。高等教育機関における日本語学習者の数は、高等教育機関の量的拡大、日本語学科の増設に比例して、ここ15年で飛躍的に増加した。このような日本語学習者の量的拡大は、日本語教育業界にあっては一概に歓迎すべきことだと考えられているように思われるが、このような大学大衆化状況によって日本語教育そのものが、ある質的変化を被らざるをえなくなったという事実を見落とすべきではない。それは、不本意就学 (involuntary attendance) の問題である。「学生数の増大とユニバーサル高等教育への移行は、多くの学生に大学への就学をしだいに義務と感じさせるようになり、かれらはますます“自分の意志からでなく”就学する存在となりつつある」とトロウ (1976: 30) は指摘している。このように、大学生になるということが、限られたエリートの特権的な権利から、大衆の義務へと変貌したことは、日本語学習者の質にも相応の変化をもたらすことになる。当然、そこには、大学入学試験の点数が不十分であったため、“仕方なく”日本語学科に振り分けられた、という階層が一定数含まれることになるのである。そのような学生にとって、日本語を使うということに何ら必然性がない環境の中で、4年間という長期間にわたって学習意欲を持続させるのはきわめて困難なことであるだろう。このような大衆化状況に起因した日本語学習に対するモチベーションの低下という現象が構造的に再生産されている環境の中にあつては、ともすれば、惰性が合理化されていくことにもなりかねない。つま

5/19

り、教師も学生も、旧来的な習慣化されたフォーマット——すなわちエリート教育型のフォーマットやその派生的変形バージョン——に従った授業が進められていくことを暗黙の内に要求するようになり、それが果たして状況に適した最も有効な方法であるのか、という問い自体がわれわれの思考から奪われてしまう恐れがあるのである。

### 1-3. ギャップの構造的再生産

トロウ (1976) は、マス型からユニバーサル型への移行期にあらわれるさまざまな種類の葛藤や困難について次のようにまとめている。

- (一) 高等教育機関の基本的な本質と機能にかんして、教授団や学生層に合意 (consensus) が成立していないこと
- (二) 大学在学者のなかで自分の意思でなしに通学してくる者の比率がたかまっていること
- (三) 正規の大学教育プログラムの拘束にたいして、多くの数の学生層から一種の反乱が生じていること

大学とは何であるのかという基本認識に関して、大学と学生の間で合意 (consensus) がないということは双方にとって好ましい状況とは言えないが、大学側 (教員) の持っている構造的保守性が、そのような変化への適応を鈍らせることにでもなれば、そのような場では多くの時間と労力と資源が浪費されてしまうことにもなる。

日本の大学業界は、近い将来、大学進学年齢 (18 歳) 人口の減少によって、「あたかもある種の構造的な不況業種のような様相を呈する」と言われているが [竹内 (2008)]、日本以上に深刻な少子化状況にある台湾においても状況は変わらない。

このような構造的な不況業界にある個々の大学は——とりわけ私立大学は——学生の数を確保しなければならないという経営上の前提のため、大衆化をよりいっそう進めざるを得ず、一方の学生の側も、近年の不況=就職氷河期の中にあつて、大卒が義務化されている状況を受け入れざるを得ない。われわれは、このような不本意就学者と大学の理念とのギャップという問題について、それを学生個人の学習姿勢の問題に還元することなく (つまり、学生個人の「不真面目さ」や「怠慢」に問題の原因があるのだ、という処理の仕方に自足することなく)、よりマクロ的視点から、構造的に発生した問題として考えていく必要があるだろう。

## 2. シンポジウム開催の目的と意義

本シンポジウム開催の目的は、上記のような大学大衆化状況にあつて、日本語教育が直面している限界を見据えた上で、その中からどのような可能性が開かれるのかを検討することにある。

もちろん、この場で議論される具体的テーマは、個々の講演者・発表者によって設定されるものだが、議論をより円滑に、かつ参加者全体で共有しやすくするために、いくつかの見通しを述べておきたい。

まず、各講演者・発表者に期待するのは、一般的に計量化が困難な、それでいながら重要なパラメーターである「学習意欲」を議論の中心に据えた上で、或いは視野に入れた上で議論を進めてもらいたいという点である<sup>1</sup>。例えば、教授法・教授理論という枠組みにおいても、「学習意欲」が常に一定不変の

<sup>1</sup> ここでいう「学習意欲」或いは、「動機付け」、「モチベーション」など、これらの概念は、そのいずれもが、それ自体考察の対象となりうるだろう。

要素として存在しているという前提の中でのアプローチと、それが変動している、或いは欠如しているという前提の中でのアプローチとは、おのずとその方向性、結果も異なってくると思われるのだが、より現実に即した議論にするために（逆に言えば、理想化された環境を「創造」した上で編み出されたような空理空論に陥らないために）、われわれの抱えている困難をしっかりと見据えておく必要があると思われるからだ。

そのような困難の一つに数えられるのが、ほとんどの私立大学で直面していると思われる多人数クラスの運営の仕方であるだろう。この問題は、必ずしも90年代以降の「大衆化」状況によって引き起こされたものとは言えないが、もし仮に「学習意欲」の欠如が常態化しているような環境と、一クラス50人を超えるような多人数クラスという条件とが折り重なったとき、学習環境をどのようにうまくデザインできるかという問題が——個々の教師という以上に、日本語学科という組織において——強く問われることになるだろう。

もちろん、授業は、個々の学生の学習過程の「部分」を担っているに過ぎず、授業のみで学習が自己完結しているわけではない。多人数クラスという条件の中では、一つ一つの授業はそれ自体がトレーニングの時間であるというよりも、授業外の自主トレーニングを前提とした、トレーニングプログラムの全過程を管理-反省する場、或いは学習を習慣化させるための訓練方法の初期的導入の場という位置づけへとシフトしていくということも考えられる。となれば、学生を「大量」に受け入れ、その一人一人の能力を効率よく、効果的に向上させるようなシステムを構築する上では、学生個人を自己管理-自己統治できるような自律的主体へと変形させることができるようなプログラムが要請されることになるはずだ。その意味で、「自律学習」の問題領域へと議論を接続させることもできるだろう。

さらには、学習過程全体を包括的にデザインし、これまで偶発性に委ねて処理してきたさまざまな要素（例えば、クラスの雰囲気、休み時間の教師の振るまい、など）に内省を加え、できるだけインテンショナルなかたちで、教師が、或いは学科が学習過程に関わることができるのだとすれば、組織のデザインから教師個人の一つ一つの言動まで、われわれの環境を構成している諸項目を細部に至るまで改めて再検討する試みも求められるだろう。

さらには、学習過程を包括的にデザインする上では、教育効果、或いは学習効果を的確に測定することも欠かせないプロセスである。現在、一般的に行われているのは、全学で制度化されている中間テスト/期末テストを利用するというやり方だが、この種の「アチーブメントテスト」だけではなく、例えば、OPI (Oral Proficiency Interview) のような、言語能力の測定方法を（共通）試験として導入した結果等を検証するといったような試みがあってもよいかもしれない。

さて、これまで述べてきたように、大学大衆化状況にあって、台湾の日本語教育業界は眼に見えない壁にぶつかっている。その中で、われわれは、その限界を見据えた上で、どのような新たな可能性を模索することができるだろうか。もちろん、論点となるのは上記に限らず、多様なアプローチが可能だろう。各論者には、それぞれの自由な観点、多角的な視点から問題を提起してもらい、それによって、本シンポジウムが台湾における日本語教育の方向性を担いうるような、有益な議論の場となることを期待したい。

(文責 山藤夏郎)

#### 参照文献

財団法人交流協会 (2009) 「2009年度 台湾における日本語教育事情調査 報告書」

竹内淳 (2008) 「日本の研究教育力の未来のために—競争的施策の課題—」『現代思想』36-12

マーチン・トロウ/天野郁夫・喜多村和之訳 (1976) 『高学歴社会の大学—エリートからマスへ—』東京大学出版会

## 報名表

請依您的情形，勾選以下選項，並請於今年 10 月 12 日（星期五）以前以傳真、電話、E-Mail 方式回覆，再次感謝您的配合，謝謝。

服務單位：\_\_\_\_\_ 姓名：\_\_\_\_\_

聯絡電話：\_\_\_\_\_ E-Mail：\_\_\_\_\_

◆午餐 需要 (素食, 葷食) 不需要

◆其他：當日回程需搭乘計程車者，請告知報到處(將代為預約計程車)。

【聯絡處】：710 臺南市永康區南臺街 1 號 南臺科技大學人文社會學院應用日語系 國際學術研討會籌備委員會

【聯絡電話】：(06) 253-3131 分機 6301 / 【傳真號碼】：(06) 301-0007

【E-Mail】：[jap@mail.stust.edu.tw](mailto:jap@mail.stust.edu.tw)

【聯絡人】：黃心瑜 (應用日語系助教)

## 申込表

參加ご希望の方は、以下に必要事項をご記入の上、10 月 12 日(金曜日)までに、ファックス・電話・E-Mail いずれかの方法で下記連絡先までご一報くださるよう、お願い申し上げます。

ご所属：\_\_\_\_\_ お名前：\_\_\_\_\_

電話：\_\_\_\_\_ E-Mail：\_\_\_\_\_

◆昼食 必要 (素食 葷食) 不要

【連絡先】：710 台南市永康区南台街 1 号 南台科技大學人文社會學院應用日語系 國際學術シンポジウム運営委員会

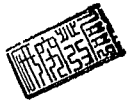
【電話】：(06)253-3131 分機 6301 / 【ファックス】：(06)301-0007

【E-Mail】：[jap@mail.stust.edu.tw](mailto:jap@mail.stust.edu.tw)

【連絡担当】：黃心瑜 (応用日語系助教)

※ 中文版或日文版填寫其一即可。

※ 中文版、日文版、いずれかにご記入頂ければ、けっこうです。



## 邀 請 函

敬啓者

本系誠摯邀請您參加2012年10月20日(星期六)，南臺科技大學應用日語系主辦「大學普及化之日語教育的可能性—動機管理、大班級授課、學生品保—」國際學術研討會。敬請前來共襄盛舉。

- 【會議名稱】南臺科技大學人文社會學院應用日語系 2012年國際學術研討會
- 【主題】「大學普及化之日語教育的可能性—動機管理、大班級授課、學生品保—」
- 【宗旨】請參考附件「國際會議舉辦目的」之說明。
- 【主辦單位】南臺科技大學人文社會學院應用日語系(所)
- 【合辦單位】[日本]金澤大學留學生中心
- 【協辦單位】公益財團法人交流協會
- 【地點】南臺科技大學 國際會議廳(臺南市永康區南臺街1號 E棟[=圖書館]十三樓)
- ※ 交通資訊請參閱：[http://www.stust.edu.tw/about\\_html/traffic\\_2.html](http://www.stust.edu.tw/about_html/traffic_2.html)
- ※ 國際學術研討會在本校圖書館舉行，會場所請參閱[http://www.stust.edu.tw/about\\_html/stutmap.html](http://www.stust.edu.tw/about_html/stutmap.html)地圖中標示「E」為本校圖書館。
- 【時間】2012年10月20日(星期六)

肅此邀請・順頌

時祺

南臺科技大學應用日語系(所)主任 鄧美華  
2012年9月28日

- ※ 參與研討會者將發予研習證明書。
- ※ 當天開車到校者，敬請攜帶本邀請函，謝謝您的協助。

## ご 案 内

各位

謹啓 時下ますますご清祥の段、お喜び申し上げます。  
さて、今度の10月20日(土曜日)、弊学科主催の国際学術シンポジウムを開催いたします。ご多忙のところ恐縮でございますが、万障お繰り合わせの上、ご参加くだされば幸いに存じます。  
まずは略儀ながら、書中にてご案内申し上げます。

謹白

2012年9月28日  
南台科技大學應用日語系(所)主任 鄧美華

記

- 【名称】南台科技大學應用日語系 2012年国際学術シンポジウム
- 【テーマ】「大学大衆化状況における日本語教育の可能性——モチベーション管理・多人数クラス・学習効果測定——」
- 【開催目的と意義】別紙「シンポジウム開催主旨」をご参照ください。
- 【主催】南台科技大學人文社会学院應用日語系(所)
- 【協力】[日本]金澤大學留學生センター
- 【助成】公益財團法人交流協會
- 【会場】南台科技大學 國際會議室(台南市永康區南台街1号 E棟[=圖書館]13階)
  - ※ 当大学までの交通については、以下をご覧ください。(http://www.stust.edu.tw/about\_html/traffic\_2.html)
  - ※ シンポジウム会場となる國際會議室は、本校のE棟[=圖書館]内にございます (http://www.stust.edu.tw/about\_html/stutmap.html 掲載の地図において、「E」と表示されている場所です)。
- 【日程】2012年10月20日(土曜日)
- ※ シンポジウムに参加頂いた方には、参加証明書を発行いたします。
- ※ 当日、お車でいらっしゃる方は、大学に入る際、門の係員に本案内状をお見せください。

以上

